

Gi-Wook Shin and Michael Robinson eds.,

Colonial Modernity in Korea.

Cambridge (Mass.) and London: Harvard University Asia Center, 1999, xiii + 466pp.

並木真人

I

「解放」からすでに半世紀が過ぎ、また、南北和解の雰囲気が高まる現在、日本植民地支配下の朝鮮の歴史について、学問研究の対象として本格的に議論を交わすことが、ようやく可能になってきた。近年の韓国の歴史学界における「植民地近代化論」と「収奪論」との間の論争は、結末は感情的な非難の応酬に堕した感があるとはいえ、植民地期の歴史に関する学問的蓄積の進展を象徴する出来事であったと評価することができる。さらに、欧米の学界を中心に、ポスト・コロニアル理論に基づく研究の成果が続々と発表されている。そうした中において、1996年に米国で開催され、米国、韓国、日本などの研究者が参加した学術会議における報告を発展させた本書の刊行は、誠に時宜を得たものである。

初めに、本書の構成は下記のとおりである。

序章 植民地期朝鮮の再考 (Gi-Wook Shin [米国・カリフォルニア大学ロサンゼルス校] and Michael Robinson [米国・インディアナ大学])

第1部 植民地的近代とヘゲモニー

第1章 日本統治下朝鮮における近代性、合法性、権力 (Chulwoo Lee [韓国・成均館大学])

第2章 朝鮮における放送、文化的ヘゲモニー、植民地的近代 (1924~45年) (Michael

Robinson)

第3章 植民地的コーポラティズム——農村振興運動 (1932~40年) —— (Gi-Wook Shin and Do-Hyun Han [韓国精神文化研究院])

第4章 「文化政治」の限界——朝鮮米に対する日本人の反応における国際主義とアイデンティティ—— (Michael A. Schneider [米国・ノックス大学])

第5章 植民地工業発展と朝鮮人労働者階級の出現 (Soon-Won Park [日本・慶應義塾大学])

第6章 日本の帝国遠距離通信ネットワークにおける植民地朝鮮 (Daqing Yang [米国・ジョージワシントン大学])

第2部 植民地的近代とアイデンティティ

第7章 正統性の代償——女性と権友会運動 (1927~31年) —— (Kenneth M. Wells [オーストラリア国立大学])

第8章 コロニアルでもなくナショナルでもなく——朴婉緒『母の杭1』における「新女性」の創造—— (Kyeong-Hee Choi [米国・シカゴ大学])

第9章 内面風景——李光洙『無情』と近代文学の起源—— (Michael D. Shin [シカゴ大学・大学院生])

第10章 植民地期朝鮮におけるナショナル・アイデンティティと「農民」範疇の創出 (Clark Sorensen [米国・ワシントン大学])

第11章 人権を求めて——植民地期朝鮮における「11」運動—— (Joong-Seop Kim [韓国・慶尚大学])

第12章 近代的・民主的構成概念としての民族——申采浩の歴史記述—— (Henry H. Em [米国・ミシガン大学])

終章 ヘーゲルの幽霊の除去——朝鮮のポスト・ナショナルな歴史記述に向けて—— (Carter J. Eckert [米国・ハーヴァード大学])

2人の編者をはじめ寄稿者の多くは、各国の大学で助教授ないし准教授の職位にあり、米国で教育を受けて1980年代以降業績を公刊するようになった、若手の研究者である。

II

次に、各論文の内容を紹介しておく。

序章では、編者によって、各論文に通底する問題意識が総括的に示される。編者によれば、近現代の朝鮮における歴史記述は、植民地期の民族運動や解放後の分断国家の正当性・正統性の問題と直結して、優れてナショナルなものであった。そして、植民地期を論ずる語り口として、「抑圧対抵抗」、「搾取対開発」など、極度に単純化された二元論的分析枠組が貫徹し、コロニアリズムとナショナリズムの宿命の葛藤が強調されてきた。しかし、冷戦の終焉は植民地史研究の復興をもたらし、現状では、従来の制約に囚われない、柔軟で多角的な研究視角の確立が要請されている。その際、本書の各寄稿者が注目するのが、ナショナリズムに加えて、当該期におけるコロニアリズムとモダニティの緊密な関連、特に植民地当局による「ヘゲモニーとしての近代」の利用の問題である。ポスト・コロニアル研究の理論的成果を受容した上で、ナショナリズムによるモダニティ占有、コロニアリズムとモダニティの不適合という、従来の価値偏重で本質主義的な歴史記述を克服し、コロニアリズム、モダニティ、ナショナリズムの間の多様な相互作用を分析枠組として設定することにより、植民地期の固有で複雑で微妙な歴史過程を理解することが、本書の各論文が共有する目標である。

それにつづく本論は、モダニティ確立の過程における日本による文化的ヘゲモニー獲得の企ての推移を論じる第1部「植民地的近代とヘゲモニー」(第1章から第6章)と、植民地的ヘゲモニーとの複雑な関係——峻拒から支持に至る——における朝鮮の多彩なアイデンティティ形成の模索とカウンター・ヘゲモニー確立の過程を論じる第2部「植民地的近代とアイデンティティ」(第7章から第12章)とに分けられる。

第1章は、保護国期—植民地期の法制と警察権力について論じ、厳密な統計調査に基づき日常生活の細部に介入する統治のあり方に、「近代性」を発見する。そして、日本の支配の抑圧的で非民主的な性格を前近代的なものとして評価してきた従来の見解を批判する。さらに、総力戦体制確立に向けた「意識の植民地化」=思想統制の実態を解明する。

第2章は、ラジオ放送が有した両義的性格を明らかにする。ラジオは、従来民族主義的な歴史家が主張したように、日本の宣伝と文化的同化主義に寄与する情報統制システムであっただけでなく、朝鮮語放送の実施を通じて、儒教的なエリート文化に代わる近代的大衆文化を創造する役割を担い、カウンター・ヘゲモニーの創出に貢献したというのである。

第3章は、日本の支配を「強制と抑圧」として一面的に断罪する見解を批判し、農村振興運動の実証を通じて、これが農家の救済と支配への同意調達のために当局が実施した、植民地コーポラティズムに基づく社会政策であったと評価する。そして、運動の中で形成された1930年代の国家—社会関係が、解放後の南北政権の性格にも影響したと展望する。

第4章は、日本本国のマス・メディアに現われた、産米増殖計画など「文化政治」期の植民政策に対する言説を分析する。矢内原忠雄や東郷実は、産米増殖計画が経済開発とも朝鮮民族主義の懐柔とも無縁であることを批判し、植民地の経済開発には文化的民族主義の承認が必須であると提言した。食糧問題解決のための海外移民の奨励も同様の脈絡に由来するものであった。当該期の植民政策は、帝国のアイデンティティを強化する本来の意図に反して、皮肉にもリベラルな国際主義を助長する結果を招いたのである。

第5章は、工業化に伴う朝鮮人労働者の成長に関して、研究史を総括する。そして、インフラの開発や労働者の訓練に関心を払った植民地経済政策の特異性に着目する。また、植民地的近代の建設に参加した労働者の実態と意識を分析する。さらに、植民地後期の労働政策や労資関係が解放後に継承されたことを指摘し、従来の政治的志向の時代区分とは異なり、1930~60年をひとつの過渡期として把握する

ことを提唱する。

第6章は、通信事業における技術開発と保守管理の問題を分析し、日本の帝国システムに朝鮮を包摂する過程で生じた困難を解明する。この問題に関しては、帝国全体の情報ネットワーク確立のため統合を図る通信省と、従来の自律性の維持を求める朝鮮総督府が全面的に対立した。通信事業を介して、植民地帝国のあり方を巡る矛盾が露呈したのである。

第7章は、女性運動団体権友会の活動を考察し、ナショナリズムが神聖化されると共に、民族が階級やジェンダーなど他の集団的アイデンティティを圧倒したことを批判する。そして、植民地支配下において、家父長制からの女性解放という、フェミニズムの問題は十分に理解されることなく、男性の自己決定権の獲得を目指す民族主義や社会主義の運動に従属させられていたことを暴露する。

第8章は、韓国の女性作家朴婉緒の自伝的小説『母の杭1』(註1)を素材に、植民地期の近代教育と男尊女卑の家族制度の弱化とを通じて登場した『新女性』のイメージについて論じる。加えて、必ずしも政治的に自覚した行動をとらない当該期の女性の新たな可能性の存在と、世代や地域によるジェンダーや植民地的近代に対する反応の違いを明らかにする。

第9章は、文芸評論家柄谷行人が発案した「内面風景」なる概念を援用して、植民地期の近代文学の登場と朝鮮人の民族的アイデンティティ模索との関連を分析する。具体的には、李光洙の小説『無情』に即して「情」という觀念の獲得過程を綿密に追跡し、植民地という現実＝風景に対抗して、自己のアイデンティティを形成する理想＝内面性が発見されたことを論証する。

第10章は、「農民」概念の形成過程と民族的アイデンティティとの関わりを検証する。植民地化に伴う身分秩序の解体は、来るべきネーションの基盤として「農民」への着目をもたらした。他方、都市の「近代性」は植民地的性格を帯びるものであった。それゆえ、植民地では農村こそが朝鮮の民族的アイデンティティを保証するという見解が確立され、これが1980年代の「民衆」(minjung) 範疇を中心とする民族意識の再構築、「民衆」運動の高揚にまで連続して

いるのだという。

第11章は、被差別民「白丁」の解放を求める衡平運動を考察し、植民地的近代が果たした二重の役割、すなわち、近代教育を通じた人権や平等の觀念の確立と、都市化や工業化を通じた社会的上昇の可能性の賦与とを論じる。とりわけ、後者は富裕な「白丁」の登場による運動の高揚をもたらす一方、共同社会の連帯を阻害する役割も果たした。運動の分析を通じて、搾取対抵抗の二元論では植民地的近代の複雑な性格を把握できないことが強調される。

第12章は、民族という構成概念の近代的な性格を証明する作業の一環として、歴史家申采浩の言説を分析する。その結果、彼の言説が民族史学の確立に寄与したことが再確認される。しかし、同時に、彼の言説には、故地「満州」への執着や無政府主義に基づく民衆の強調など、現存の南北の国民国家の枠組に収斂しない政治的共同体に関わる視点や契機が存在することも、併せて検証される。

終章では、玄吉彦の小説『殺と中身』を手掛かりに、朝鮮におけるナショナルな言説の力と広がり再び批判的に紹介される。そして、国民国家を世界史の普遍的な進歩の中での理性と自由の媒介物とみなす、ヘーゲル流の歴史觀の呪縛から脱却し、よりリベラルでポスト・ナショナルな朝鮮史研究を創出することが提言される。また、ナショナリズムや冷戦イデオロギーのごとく、特定の前提に制約された演繹的研究方法が批判され、多元的で帰納的な研究の必要性が強調される。

III

以上のように、本書の内容は、政治史、経済史から社会史、運動史、文学史、思想史、さらには歴史方法論に及ぶ広範囲なものであり、英語圏で刊行された植民地期朝鮮に関する論文集としては、1970年代に米国のウェスト・ミシガン大学から出された2種類の論叢 [Nahm 1973; Kim and Mortimore 1975] 以来、久方振りに編まれた大部な成果である。コロニアリズム、モダニティ、ナショナリズム、アイデンティティ形成などに対する、従来の二元的で

本質主義的な理解を止揚し、植民地期の研究に対するより包括的で多元的なアプローチを介して、これらの概念の人為性や非本質性の理解を深めようとする本書の意図は、基本的に達成されていると言ってよい。

植民地期を通じて朝鮮史研究から排除され、植民地支配を正当化・合理化する手段としての「植民史観」の受容を強要されてきた朝鮮人にとって、自国の歴史を研究すること自体が、朝鮮総督府の同化政策の桎梏から脱却する民族精神の発露、まさしく民族運動であった。植民地当局の様々な抑圧に抗し、1930年代に隆盛を極めた朝鮮学(国学)研究は、文化的民族主義の一翼を担いつつ、解放後の歴史研究、歴史教育の基盤として継承されていった。このような経緯が、現在にいたるまで、植民地期朝鮮に対する歴史研究を方向付けてきたのである。朝鮮史研究の有するナショナルな特性は、称賛の対象となることはあっても、正面から挑戦されることは多くなかった。ましてや、植民地経営者の「子孫」である日本人研究者にとっては、朝鮮史を取巻くナショナルな呪縛は、時に煩わしいものであっても、公然と批判できる性格のものではなかった。むしろ、幾許かの贖罪意識に導かれ、若干の違和感を押し殺してナショナルなものを受け許容することが、朝鮮史を「理解する」常道であると見なされていた、と言っても過言ではない。このような淫靡な状況に対して、本書は、「護符としてのナショナリズム」という植民地期朝鮮史研究に固着した病弊を別抉し、決然と審判の俎上に載せたという点で、劃期的な企てである。

また、民族運動に対する賛美を除き、専ら否定と断罪の対象としてのみ植民地期を把握するという、従前の研究姿勢は、却って植民地期を静態的かつ停滞的に、また前後の時期と断絶的に理解する傾向を助長してきた。それに対して、本書では、植民地期を通じた朝鮮社会の変化、および植民地期と解放後との連続性に、少なからぬ関心が払われている。ほぼ一代にたらんとする植民地期を動態的に解明することこそが、朝鮮社会の長期的変動の中で植民地期を正確に位置付けることを可能にするものであると考えられる。これまで粗案に扱われてきた、この

ような視角が確立されることの意義は大きい。

さらに、個々の知見や視点に関しても、新たに発見されたものや再解釈を施されたものが散見され、鼓舞される点が少ない。その自由で新鮮な発想には羨望を禁じ得ない。紙幅の関係上2、3の例を挙げるにとどめるが、第1章では、酒税・煙草税の創設に伴う自家消費生産の禁止が一般大衆の反発を招き、違反者を多数生み出した一方で、密造の摘発を通じて醸造業者らの利益を増大させ、植民地権力と業者との協力関係が図らずも生成されたことが描出される(pp.40-42)。また、第6章では、1920年以降の朝鮮語電報の数の減少を基に近代的ビジネス用語としての日本語の普及を説明し、強制ではなく誘導(ヘゲモニー)の結果としての植民地的近代の実例を呈示する(pp.172, 186)。さらに、第11章では、衡平運動の盛衰を、都市化による外食産業や食肉慣習の拡大、それに基づく食肉加工の利益増大、屠場経営への日本人や非「白丁」の参加、結果として「白丁」の世襲的な既得権の侵害という因果連関でもって解釈する(pp.316-317)。このように、興味深い記述が随所に見られるのである。

ただし、本書の内容に不満がないわけではない。序章で述べられているように、本書に通底する問題意識の一端には、ミッシェル・フーコーの「ディスココース」概念とアントニオ・グラムシの「ヘゲモニー」概念が強く影響を及ぼしている(p.7)。しかしながら、他方でフーコーが「近代」理解に不可欠な視角として呈示した「ディシプリン」概念については、第1章において、植民地期朝鮮人の「従順な身体」(docile body)の形成に関連して、国家による規律技術の利用に関わる若干の言及が見られる(p.36)ものの、十分に議論が展開されているとは言い難い。近代が優れて権力的な構造を有することは、贅言を俟たない。しかも、それが各個人の内発的な服従、自己規律に淵源することが、近代を論じる場合の重要な鍵となるのである。本書の行論上、グラムシの「ヘゲモニー」概念と表裏一体の関係にあると解釈し得るフーコーの「ディシプリン」概念が、十全に論理展開されていないことは、看過し得ぬ瑕疵のひとつであると言わざるを得ない。それに対して、こ

の課題に答えるように、韓国では、社会学者の中から植民地期の社会を「規律権力」概念との関連で理解しようという、野心的な試み [김·정 1997] が提出されている。また、本書では、いわば尖端的な「近代性」の様相に関心が払われる一方で、植民地期の日常生活の中に現われたそれについては、必ずしも十分に考慮されていない憾みがある。これに関しては、やはり当時の雑誌や新聞の記事を渉猟した成果 [김 1999] が、韓国において発表されている。植民地的近代の複雑で微妙な性格を理解するためには、本書のような大部な著作でも万全ではなく、これらの成果もあわせて参照されるべきである。本書の価値は、むしろ、このように植民地期を巡る問題の所在を示唆してくれることに求められるのである。

IV

最後に、本書の刊行を受けとめた我々自身の課題として、日本の学界の中からも、韓国や米国の問題提起にこたえ得る成果を提出することが期待される。現在、ごく少数の研究者の「孤軍奮闘」を除いて、日本では植民地期の研究が活発であるとは言い難い。韓国などから公刊される膨大な成果をフォローする追さえ、容易には確保できていない。まして、集団研究の作業などはほとんど見られない。とはいえ、現在の研究地平に即応した問題意識を共有し、論議を重ねた末の成果を世界に向けて発信することが、喫緊の責務であることは、間違いない。そのためにも、本書のような大胆かつ柔軟な発想が要求される

のである。

(注1) 最近、朴福美氏により日本語に翻訳された(『新女性を生きよ!』梨の本舎 2000年)。

文献リスト

<韓国語文献>

- 김진균 [キム・ジンギョン]・정근식 [チョン・グンシク] 1997. 『근대주체와 식민지 규율권력』[近代主体と植民地規律権力] 서울 [ソウル] 문화과학사 [文化科学社].
- 김진송 [キム・チンソン] 1999. 『현대성의 형성——서울에 판스홀름을 허가라——』[現代性の形成——ソウルにグンスホールを許可せよ——] 서울 [ソウル] 현실문화연구 [現実文化研究].

<英語文献>

- Kim, C. I. Eugene and Doretha E. Mortimore eds. 1975. *Korea's Response to Japan: The Colonial Period*. Kalamazoo: Center for Korean Studies, Western Michigan University.
- Nahm, Andrew Changwoo ed. 1973. *Korea under Japanese Colonial Rule: Studies of the Policy and Techniques of Japanese Colonialism*. Kalamazoo: Center for Korean Studies, Western Michigan University.

(フェリス女学院大学国際交流学部教授)